

モーツァルトの“時計”のお話

16世紀に発明されたといわれる機械式の時計が小型化されるのは動力にゼンマイが発明されたからである。ゼンマイといっても今では知らない人が多いが、これは薄い鋼の板を蚊取線香のような形に巻いたものである。これの真中に棒のようなものを立てそれを軸にして巻き上げると蚊取線香はみるみる小さくなって100円玉くらいになる。そこで手を放すと、ゼンマイはアツという間に元の蚊取線香に戻ってしまう。この戻る力にブレーキをかけてやればゼンマイは少しずつゆっくりとふくらむわけで、その力が時計の原動力に使えるという仕掛である。

さて、モーツァルトが“時計”(Uhr)という名で呼んでいる楽器は一種のオルゴールのことで、ゼンマイ仕掛でゆっくりと回転する円盤なり円筒のところどころは穴をあけておいて、そこから空気を吹き出すようにする。吹き出された空気の行先はミニパイプオルガンで、並んだ管のどれかに空気が入るとブーという音になる(ハーモニカにその空気を吹き込んでも音が出る)。これがモーツァルトの頃に発明されて面白がられていた“時計仕掛けのオルガン”という玩具に近い楽器なのである。

話は変わるが、当時の流行に“ロウ人形博物館”というものがあった。王さまや英雄などを実物大のロウ人形(着色済)で再生して並べるもので、テレビも写真もない時代のこと、この企画は大当たりだった。当時のウィーンでこの博物館を持っていたのはダイム伯爵という人物で、彼は1790年に亡くなった二人のオーストリア帝国の要人(皇帝ヨーゼフ2世、ラウデン元帥)のロウ人形を新たに陳列に加えることになり、この人形のための追悼の音楽を書いてくれとモーツァルトに発注した。で、その音楽は“時計”によって自仿演奏するというのでこれもこの企画の人气に拍車をかけた。

モーツァルトの死後の1799年、ハンガリーのブルンシュヴィク伯爵家の美しい令嬢テレゼとヨゼフィーネのふたりが、ウィーンに出て来た新進ピアニストのベートーヴェンに2週間の約束で弟子入りした。このときダイム伯爵はヨゼフィーネ嬢に恋をし、あつという間にプロポーズし、結婚した。それから5年後にダイム伯は亡くなり、ヨゼフィーネがくだんのロウ人形博物館の持主で館長ということになった。そのヨゼフィーネ未亡人に恋をするのがベートーヴェンということになるのだが、詳しい事は拙著「ベートーヴェンとベートーヴェン」で。

石井 宏(音楽評論家)

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。東京大学文学部美学科および仏文科を卒業。1993年から1994年までNHK総合テレビの情報番組「ナイトジャーナル」でCD評を担当。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、「反音楽史 さらば、ベートーヴェン」(新潮社)で山本七平賞を受賞。